

平成 26 年度

発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業

成果報告書（概要版）

1. テーマ

発達障害の可能性のある児童の実態や教育的ニーズに応じた適切な指導や支援の在り方

2. 問題意識・提案背景

匝瑳市では、市内小中学校の各担任から見て学習面や行動面で、特別な支援が必要な児童生徒が全体の 11%程度在籍し、しかも、この割合は年々上昇傾向にあると、平成 25 年度の匝瑳市特別支援連携協議会・専門家チームの会議で報告されている。

また、市内いくつかの学校から、特に通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒に対する指導・支援の在り方について相談が寄せられ、深刻な教育課題となっており、早期の解決が求められている。

こうした様々な教育的ニーズを持つ子供たちの増加によって、今後、これまで以上に教員一人一人に高い専門性と指導力が求められることになる。

したがって、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒に対する指導・支援の在り方について研究することが、これからの学校教育を推進していく上でも、またインクルーシブ教育を推進していく上でも急務と考え、特別な教育的支援を必要とする児童の割合が高い匝瑳市立栄小学校と匝瑳市立野田小学校の 2 校を研究指定校に選定し、研究を進めることにした。

3. 指定校について

（小学校の場合）

そうさしりつさかえようがっこう

指定校名：匝瑳市立 栄 小 学 校													
		第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
		児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級		20	1	28	1	23	1	25	1	21	1	31	1
特別支援学級	知的	1		1		0		6		0		3	2
	情緒	0		1		2		5		1		0	2
通級による指導の対象者数		2		2		0		2		1		2	1
教職員数													
校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	スクールカウンセラー	その他	計			
1	1	12	1	2	0	1	3	0	1	22			

そうさしりつめだしょうがっこう													
指定校名：匝瑳市立野田小学校		第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
		児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級		43	2	38	2	28	1	41	2	39	2	40	2
特別支援学級	知的	1		1		0		0		0		1	1
	情緒	1		2		1		1		3		1	2
	言語	2		0		1		0		0		0	1
通級による指導の対象者数		0		3		3		1		0		0	
教職員数													
校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	スクールカウンセラー	その他	計			
1	1	17	1	1	0	1	1	1	3	27			

4. 指定校における取組概要

(1) 発達障害支援アドバイザーの効果的な活用

両校に1名ずつ発達障害支援アドバイザーを配置し、学習面のサポートや研究推進に取り組んだ。主に通常の学級の算数の授業を中心にチームティーチングを行いながら、児童観察を行った。また、保護者の了承を得て、児童への検査を実施したり、補充学習を行った。さらに、校内支援委員会などで、コーディネーターや担任と連携し、児童のつまづきや困り感、効果的な指導方法について協議した。

(2) 発達障害の可能性のある児童の早期発見に向けた取組

学級全体における実態把握の工夫としては、担任や発達障害支援アドバイザーによる児童観察を実施するとともに、低学年児童を対象に読みに関するアセスメントを実施した。また、特定の児童に対する実態把握の方法としては、必要に応じて保護者と面談し、許可を得て検査を行った。さらに、幼稚園や保育園と小学校との連携活動の一層の充実を図るため、指導者同士、子供同士の交流活動を工夫した。また、発達障害及び発達障害の可能性のある児童に対する保護者の理解を啓発する取組を工夫した。

(3) 児童の実態や教育的ニーズに応じた適切な指導方法の工夫・改善に向けた取組

すべての児童が理解しやすい授業をめざし、指導方法の改善として、主に算数の授業において、先行研究を元に、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりに取り組むとともに、ICT機器などの効果的な活用について研究した。

(4) 教職員の専門性を高める取組

授業研究会や専門家を講師とした講演会を実施し、特別支援教育に関する専門性を高める機会を設けた。また、研究推進に資する先行研究や資料、文献など、様々な情報を匝瑳市教育委員会と指定校、指定校相互で提供しあった。さらに、各指定校の職員間で情報が共有できるような工夫をした。

5. 主な成果

(1) 発達障害支援アドバイザーの効果的な活用について

発達障害支援アドバイザーの算数の授業を中心とした個に応じた指導や支援により、授業の中で子供の気づきを促し、「できた」「わかった」という達成感や満足感を喚起することができた。特に、算数学習では、個人差も大きいので、チームティーチングの中で個に応じた指導や支援が効果的に行われた。また、朝自習や放課後の時間を利用して、補充学習など、個別の支援を行い、徐々に成果が表れ始めている。研究推進に関しても日々の児童観察から得た様々な情報を元に対応を協議し、より具体的な指導方法や支援を模索することができた。さらに、中学校の教職員と6年生児童に関する情報交換を行う際に中心的役割を果たした。

(2) 発達障害の可能性のある児童の早期発見について

低学年の児童について、読みに関するアセスメントを計画的に実施し、データを蓄積し指導に役立てることができた。また、担任がアセスメントを行うことで、普段の授業や学校生活の中でも、そうした視点を意識して子供たちに接し、これまで以上によく観察するようになってきている。さらに、特定の児童の詳細な実態把握については、保護者の了解を得て検査を行い、その結果に基づいて指導や支援を行うことができた。

幼稚園や保育園と小学校との就学前の打ち合わせ、授業参観・保育参観、交流活動の打ち合わせなど、様々な交流活動を充実することで、入学前の子供たちの実態を把握することができ、小1プロブレム解消の一助にもなった。

また、発達障害及び発達障害の可能性のある児童に対する保護者の理解を啓発する取組として、個別の面談や入学説明会などの機会を利用して、リーフレットによる支援方針の説明などを行い、保護者に理解されつつある。

(3) 児童の実態や教育的ニーズに応じた適切な指導方法の工夫・改善に向けた取組について

ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりとして、栄小学校では、東京都日野市の『通常学級での特別支援教育のスタンダード』及び「授業のユニバーサルデザイン研究会」の『授業でのバリアを除く工夫14の視点』を元に算数学習のユニバーサルデザイン化をめざし、授業研究会を重ね、徐々に理解を深めている。授業改善に伴い、学習環境や指導案の形式を変えるなど、様々な取組を試みた。とりわけ、ユニバーサルデザインの視点を意識的に指導案に盛り込むことで、個々の実態について深く認識し、見直すことができた。また、どの児童にも分かりやすく意欲的に参加できる授業とユニバーサルデザインを意識した授業が同じ方向を向いていることを実感できた。

さらに、タブレット型パソコンやスマートボードなどICT機器の活用により、学習内容の視覚化が図られ、理解の促進や注意を集中させる上で、とても効果的であり、改めてICT活用の有効性を実感できた。

(4) 教職員の専門性を高める具体的な取組について

授業研究会を複数回実施し、研究内容の検証を行った。主に、先行研究の追試的な内容が多かったが、授業研究を重ねることで、先行研究の内容理解が深まった。発達障害の可能性のある児童への理解の深まりとともに、自校の子供たちの実態に応じた手立てを工夫できるようになってきている。さらに、タブレット型パソコンをはじめ、ICT機器の活用について試行錯誤する中で徐々に操作に慣れ、様々な場面で活用してみようという教職員の意欲が高まってきている。

また、植草学園大学発達教育学部発達支援教育学科准教授の加藤悦子氏を講師に招き、講演会を実施したことで、多くの教職員がインクルーシブ教育の理解を深めることができた。一方、職員室に関連書籍や資料のコーナーの設置や特別支援学級担当者等が特別支援教育に関する様々な情報を「便り」で発信するなど、手軽に必要な情報を得られる環境が整えられることで職員意識が徐々に高揚してきている。

しかし、一番の成果は、教職員が主体的に研究を進め、授業研究会や研修を重ねるにつれて、専門的な知識を学ぶ機会が増え、発達障害に関する認識が深まり、少しずつインクルーシブ教育に前向きになってきていることだと言える。

6. 今後の課題と対応

(1) 発達障害支援アドバイザーの効果的な活用について

今後、発達障害支援アドバイザーの役割の更なる明確化を図るとともに、本事業が終了し、発達障害支援アドバイザーが配置されなくなってもその役割を現有の教員で担っていけるような体制作りを進めていく。また、そのためにも専門性を高める研修を計画的に行っていききたい。

(2) 発達障害の可能性のある児童生徒の早期発見について

低学年の児童について、読みに関するアセスメントを計画的に実施し、データを蓄積したが、十分な分析に至っていないので、さらに分析方法について研究し、実態の正確な把握に努めたい。また、先行研究等を元に算数に関する実態把握と支援、指導のツールを模索する必要がある。さらに、WISCIVの操作研修を計画的に実施し、操作スキルを高めていく必要がある。

(3) 児童の実態や教育的ニーズに応じた適切な指導方法の工夫・改善に向けた取組について

ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりを更に進め、より効果的な学習形態や方法を模索していく。また、ICT機器の有効な活用方法についても研修を重ね、教員のスキルアップを図るとともに、認知特性に応じたICT機器の活用の可能性についても研究を進めていく。さらに、朝自習や放課後等の時間を利用した補充指導についても研究を深めたい。

(4) 教職員の専門性を高める具体的な取組について

専門家を招へいして講演会や研修会を計画に開催するとともに、授業研究会を複数回実施し、教職員の専門性を高めていく。

(5) 研究成果の普及について

公開授業研究会を計画し，市内の学校だけでなく広く周知し，参加を呼び掛ける。
また，研究実践発表会を開催するとともに研究実践報告書を作成し，研究成果を広く公表する。さらに，ホームページ等に研究成果を掲載し，誰でも閲覧できるようにして研究成果を広く普及していく。

7. 問い合わせ先

組織名：千葉県匝瑳市

- | | |
|-------------|--|
| (1) 担当部署 | 匝瑳市教育委員会学校教育課 |
| (2) 所在地 | 千葉県匝瑳市八日市場ハ7 9 3 番地 2 |
| (3) 電話番号 | 0 4 7 9 (7 3) 0 0 9 4 |
| (4) FAX 番号 | 0 4 7 9 (7 2) 1 1 1 7 |
| (5) メールアドレス | g-shido@sosa.lg.jp |